
リリドラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

空蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリードラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

【Zコード】

Z3287W

【作者名】

空蝉

【あらすじ】

ある日、ある優しき少年は親友や想い人の目の前で子供を庇い死んだ……

が、何故か死んだ筈なのに転生してしかも生まれた場所と生まれ時に何故か持っていた碧色の玉みたいな物を持つて前世の生まれ故郷ではなく海鳴市という街だった

リリカルなのはとドラえもんのクロスオーバー話です！！

不定期更新になるかも知れませんが末長くよろしくお願いします。

只今、無印編を執筆中です！！

後、この小説はハーレム要素はありませんので
ご理解お願いします！！

初めに（前書き）

作品説明

初めに

この話は、魔法少女リリカルなのはとドラえもんのクロスオーバーです！！

主人公はのび太となのはです！！

のび太は、原作のドラえもんの世界で死んでしまった設定になります。

のび太が、死んでいるのが嫌だの人は戻るを押して下さい！！

のび太は、この話で準チート設定でなのは達と同一年設定です！！

作者は、リリカルなのはをあんまり知らないですが頑張つて完結出来るよう頑張ります。

後、クレヨンしんちゃん魔忍の英雄伝と同じく不定期更新になるかも知れませんが何とぞよろしくお願いします。

第零章・プロローグ（前書き）

更新しました。

どうして、こんな事になったのかな……

そう、心中で呟いたのは丸い眼鏡をかけて蒼色の服と短いズボン着た少年で小学5年生で数々の冒険を友人達として来た主人公野比のび太は今命の灯火が消えようとしていた。

何故、のび太が死にそうになっているのかは何時ものようにジャイアンとスネ夫と静香ちゃんと一緒に学校から帰っている時に幼い子供が横断歩道を渡ろうとしている時に信号が赤信号なのにそれを無視して車が猛スピードで向かって来ている事に幼い子供は気付かずそれに気付いたのび太が走つて子供を庇い車に引かれてしまった。

「 「 「 のび太／さん！？ 」 」

ジャイアンとスネ夫と静香ちゃんは、急いでのび太の方に向かった。

「 グフツ、……ジャイアン…ハアツ…あの子は……無事？」

のび太は、血を流しながらもジャイアンに自分が助けた子供の安否を気にした

「ああ、大丈夫だ怪我はかすり傷ぐらいだ。それよりもお前の方が危ないだろ今、スネ夫が救急車を呼んだからあんまり喋るな！！」

ジャイアンは、そうのがい太に言つた。

「ふうつ……ハアツ……、僕は……もう黙日だよ。」

のがい太が、そう弱氣な事を言つと

「何、言つてんだよのがい太お前らしくないぞーー！」

「そうよ、のがい太さん！？」

そう、のがい太にスネ夫と静香ちゃんは少し怒鳴るように言つが

「…………皆だつて、分かつてゐるでしょつ…………僕が助からないと
？」

そう、のがい太は子供を車から庇つた時に体と頭を強く打つて頭から
血が大量に流れて来ている事に気が付いていた。

「そんな事を、言つじゃねよーーお前は絶対に助かるんだよ。」

「…………ふうつ…………、そつだと…………良いなー」

だが、時間は無情にも過ぎて行きのがい太は意識が朦朧として来てい
る事に気が付いた。

「（……せつはあ、やつぱり駄目みたいだな～でも子供が助かって良かつたかも……）」

のび太が、そんな事を思つてゐる……

「のび太君！～」

「…………ドラえもん。」

親友で、お兄ちゃんみたいに頼りにしているドラえもんが来た。

「のび太君、今お医者さん鞄で治すからね！～」

ドラえもんが、のび太にそつと囁つが…………

「…………もつ無理だよ……先から意識が朦朧として来ているんだよ…………」

「諦めちや駄目だよ！～？君の人生はまだまだ何だよ！～」

だが……

「…………もつ良いんだ」

「何が良いんだよ！～」

「僕ね、ジャイアン・スネ夫・静香ちゃん・ドラえもん君達に……」

… 会えた事が一番の思い出だよ…」

のび太は、そのままに黙つた時

「…………ゴホッゴホッ…」

「…………のび太、ちゃんと頼」」」

「…………嘘、今まで「ゴホッ…………あ…り…………が…とい…」」

「…………のび太君／＼むんーー？」」」

のび太は、皆に看取られ亡くなつた。

と、思っていた

オギヤオギヤ

「男のお子さんですよーーー！」

「オギヤオギヤ（あれ、僕は確かに監に看取られて死んだ筈）

のび太が、そんな事を思つていると

「私の可憐い子、お母さんですよーーー」

と、綺麗な女人がのび太に微笑んだ。

「オギヤ（どうしよう僕、赤ちゃんに転生したみたいだ）」

こうして、のび太は赤ちゃんに転生し新しい人生を送る事になった。

まさか、これから白い魔王と呼ばれる少女と出会うとはこの時のび太は知る由もなかった。

次回に続く

第零章・プロローグ（後書き）

次回は、なのはとの会話です

第一章・原作開始前（前書き）

なのはやんとの会話です。（土郎やんと桃子やんも出てます。）

第一章・原作開始前

のび太が、ここ海鳴市に転生して5年が経つた

やあ、僕の名前は森川のび太です。

え、名字は野比じゃないのかつて？それは転生した今の両親で父森川廉と母森川祐子との間に転生して生まれたから前世の名字じゃないだよ

まあ、前世の時の両親や親友達を忘れる訳では無いけど僕はここで頑張つて生きていく事を誓つた。

で、今僕はお父さんとお母さんの友達である高町士郎さんと言う人が大怪我して病院に入院しているからお見舞いしに一緒に行く事になつた……

病院に付いた僕達は土郎さんの病室に向かつた。

コンコン

「……………」

と、病室の中から男の人の声が聞こえて僕達は病室に入った。

「よお、士郎お前が大怪我何てするなんてよ~。」

「いや、僕だつて人間だからね怪我をするよ……」

「まあ、士郎君はある意味悪運が強かつたからね……それより桃子は今日来るの?~」

と、お母さんが士郎さんに聞いた。

「ああ、桃子はなのはを連れて来るつて前言つてたよ……それよりその子はのび太君かい?~」

士郎さんが、お父さんとお母さんに僕の事を尋ねた

「やうだよ、お前と子のなのはちゃんと同じ年だよ……ほらのび太士郎に挨拶。」

と、お父さんが僕に士郎さんに挨拶をするよ~つてきたので僕は士郎さんに挨拶をする事にした

「はじめまして、士郎さん。僕の名前は森川のび太です~。~」

「うそ、よひしへのび太君。」

そんなことないで、のび太達は土郎と喋つてこゐる……

「ハハハ

「ビババ……」

「お父さん、お見舞いに來たよ。」

「土郎さん、お見舞いに來ましたよ。」

「桃子さん・なのは、あつがとつ。」

土郎さんは、奥さんの桃子さんとなのはがやんおれを語つた。

「桃子、久しづりーだね」

「廉君・祐子ちゃん来てたんだ。」

「うん、島子と一緒にね。」

「じゃあ、この子が……」

桃子さんは、僕を見て挨拶して來た。

「はじめまして、のび太君高町桃子と申します……で、こちが娘の

高町なのはよ。」

「はじめまして、桃子さん・なのはちやん僕の名前は森川のび太です。」

「のび太君ね、ワタシは高町なのはなのよろしくねーー。」

「うん、よろしくなのはちやん。」

なのは side

今日、お母さんと一緒にお父さんが入院している病院に行つたら病室に知らない格好男の人と綺麗な女人ととつても優しそうな男の子が居た。

格好男の人は森川廉さんで綺麗な女のは森川祐子さんで優しそうな男の子は森川のび太君と言うそうです。廉さん達はお父さんとお母さん達と友達でお父さんが怪我で入院したからお見舞いで来たそうです。

そんな中で、のび太君が私と同い年で聞いてのび太君に普段どんな事しているのと聞いたら綾取りと本を読んだり友達と外で遊んだりしているそうです。私はのび太君に綾取りで色々な物を教えてもらいました。

「はい、これが東京タワーだよ～」

「うわあ、凄いね！！」

「何言つてるの、なのはちゃんと僕が教えた物すぐに出来るようになつたんだからそれが凄いと僕はそう思つよ。」

のび太君は、なのはに優しく微笑んでそう言つた。

「（うう、何だろのび太君の事考えていると心臓がバクバクするよ～）」

なのはは、無自覚にのび太に好意を持つた。

なのは said 終了

それから、夕方になりそろそろ帰る事になつた為のび太達は士郎達にそろそろ帰る事を言いのび太はなのはにまた遊ぶ約束をして両親と一緒に病院を後にした。

次回に続く

第一章：原作開始前（後書き）

次回は、いよいよ原作開始です！！

第一章・無印編1（前書き）

次回は、戦闘を書きます。

後書きにアンケートを書いています。

ある、夢を見た。21個の宝石が地球に降り注ぎ男の子がその21個の宝石を探す夢を…………そして何故か、僕となのはちゃんともう一人の金髪の少女と共に浮かんで21個の宝石の所有を掛けて戦うている夢を……

「…………夢か。」

僕は、田を覚ました。この時まさか夢が現実になるとは思にもしなかつた！！

「おはよー、お父さん・お母さん…。」

「おはよー、のび太ーー。」

「あー、おはよーのび太朝、飯出来ていいから早く食べなさい。」

「うん、分かった。」

僕は、朝ご飯を食べて自分の部屋に行き碧色の珠のネックレスを首にかけて鞄を持って家を出て学校のバスが来るバス停に向かった。

バス停に、着くとなのはちやんと田村すずかとアリサ・バーニングス
が先に来て居た

「おせよひ、なのはぢやん・すずか・アリサ。」

「あ、のび太君おはようなの！－！」

「おはよう、のび太さん。」

「おはよう、のび太。」

なのはちゃんと達に、挨拶をするとなのはちゃんと達も僕に返事を返した。

それから、5分後バス停にバスが到着し僕となのはちゃん達はバスの中に入つて後ろの席に座つた。それから、バスは学校に着き僕となのはちゃん達は教室に向かつた

僕となのはりやん達は、屋上でお皿いJ飯を食べる事にした。

「やつ言えば、私今日変な夢観たの。」

「「「変な夢?」」」

「何か、男の子が変な怪物と戦つててる夢なの。」

それを、聞いた僕は……

「なのまちゃんも?」

「私も?つて、のび太君も観たの夢……」

「うん、僕の場合はなのはりやんと僕とある男の子と金髪の女の子が21個の宝石?の所有を掛けて戦つててる夢何だけじね。」

「何か、ファンタジーな夢ねあんた達が観た夢?」

「そうだね。」

そんなこんなで、お昼休みも終わり僕達は教室に戻った。放課後、学校も終わり僕達は塾に向かっていた時……

『助けて！』

「「……」

なのはとのび太の頭の中に声が響いてきた。

『……誰か……助けて』

僕となのはちゃんは、また声が聞こえて来てその声の主が居るであります森に入った

数秒ぐらい走ると少し開けた場所に到着した。

周りは木々に囲まれ、中心に夕暮れの光が差し込んでいるような場所だ。その中にクリーム色の毛並みをしたフェレットが横たわって居るのを発見した。

「ハアハア、なのはちゃん・のび太君！！」

「ハアハアハア、なによりきなり走りだして……フェレット？
しかも、怪我してるじゃない！！確かにこの近くに動物病院があるからそこに連れて行きましょー！」

アリサの提案を聞いて、僕達は動物病院に向かった。

「「「失礼します！」「」「」

僕達は、怪我をしたフレットを獣医さんに任せて塾に向かった。

塾が終わり、家に帰つて来た僕は自分の部屋に行き服を着替えて下に降りて夕ご飯を両親と食べた。

タ」飯を食べ終わって今日塾に行く時になのはひやん達と怪我をしたフーレットを見つけて動物病院に連れていた事を話したらお母さんは

「無事で、良かったわね」

と言ふお父さんは

「フーレットか、もし飼い主が見つからなかったら家で飼つか~」

お父さんの言葉でお母さんも

「やつね、そうだったら家で飼いましょ。」

と、ほのぼのとした会話をした

その後、僕は部屋に戻り明日の準備をしてくると…………

『助けて、お願い僕の声が聞こえる人！僕に力を貸して下さい。危険が…………』

塾に行く時に聞こえた声が聞こえて僕は碧色のネックレスを首に掛けたお父さんとお母さんと一緒に内緒に家を出て声の方に向かった！――

次回に続く――！

第一章・無印編1（後書き）

アンケートは、のび太のデバイス名を皆様から募集しますーー！

期日は、9月9日金曜日までです。

ちなみに、のび太のデバイスはインテリジェントデバイスでTOAのリグレットが使っていた双銃型ですーー！

今回は、長いかも？

のび太 side

家から、出た僕はとにかく声の主の安否が多分危ういと思いとにかく早く走っていた。

「ハアハア（一体どこに居るんだよ！）

のび太が、走りながらそう思っていた時……

のび太の耳に爆音が聞こえた。
しかも、かなり近くのようだ

のび太は、爆音があつた場所に急いで向かつた

「（よし、次に右に曲がれば爆音があつた場所だ！）

のび太は、そう思い右に曲がるとそこは放課後に怪我をしたフェレットを預けた動物病院のすぐ近くで何故か幼なじみの高町なのはと彼女の肩に乗つたあの怪我をしたフェレットもそこに居た。

のび太 side 終了

なのは side

動物病院を後にした、私とのび太君とすずかちゃんとアリサちゃんは急いで塾に向かった。

何とか遅刻せずに着いた私達は塾の教室に入つて講師の先生が来るまで待つていた

4時間後塾が終わった、今日はこの前したテストを返された私は今回85点だった。前よりは上がったがアリサちゃんとすずかちゃんも前回より上がっていたみたいだけどのび太君には負けたみたいだつた！！

のび太君は、学校のテストでも100点を取るぐらい頭が良いからたまに私が知らない事を教えて貰う事もある。

家に着いた私は、お母さんに返された塾のテストを見せたこの前より上がった点数だったから嬉しそうだった。部屋に戻つて着替えて学校で借りた本を読んでいた時お母さんが夕飯出来たから下に降りて来なさいと言われ私は読んでいた本に目を挟んで下に降りた。

私は、晩御飯を食べた後塾に行く時にのび太君とすずかちゃんとアリサちゃんと怪我をしたフェレットを見つけた事を話して家で飼つて良いと家族に相談したら皆OKしてくれた。

寝る前にアリサちゃんとすずかちゃんとのび太君にOKが出たことをメールした私は寝よつとしていた。

その時

キイイイイイ

「聞こえますか？僕の声が…聞こえますか？…」

「タベの夢と毎晩の声と同じ声？」

私は、そう呟いた

「聞いてください…僕の声が聞こえるあなた…僕に少しだけ力を貸してください。」

「（あの子が喋っているの？）」

「お願い！僕のところへ…！時間が…危険がもつ…」

私は声が聞こえなくなると急いで家から出て動物病院へ向かった。

私が動物病院へと着くと病院内からフュレットが逃げて出ってきた。

「助けてくれたの？」

「しゃべった？！」

フュレットの後から何かが出てきた。
私はフュレットをつれて逃げ出した。

逃げている途中私はフュレットからビリビリの状況であるかを確認する
と
協力を求められた、簡単に説明するといつなる。

彼は探し物をしに別の世界から来たといつ。
自分だけの力だけでは集められない可能性があるから資質のある
私に協力してほしい。
ということになる。

話している間に謎の生物が降ってきた。

「どうすればいいの。」

「これを」

フュレットは首に下げていた赤い宝石を私に渡した。

「それを手に口を開じて心を澄まして。僕の言つ通りに繰り返して。
いい? いくよ?」

私は宝石を持ち口を開じ念じる。

「我使命を受けし者也」

「われ使命を受けし者なり」

「契約の下その力を解き放て」

「えど、契約のもとその力を解き放て」

「宝石が脈動する。」

「風は空に星は天に」

「風は空に星は天に」

「さりに力強く宝石が脈動する。」

「そして不屈の心はー。」

「そして不屈の心はー。」

「「「」」の胸に「」」の手に魔法を「」レイジングハート・セットアップ！」

「Stand By Ready Set Up」

宝石…レイジングハートは光輝く

「…成功だ。」

なのはは杖を手に持ち、私立聖祥大附属小学校の制服を改造した
よつな服装に変身した。

なのはが自分の格好に動搖し、フュレットが感動していくもなぞ
の生物は襲つてくる。

高く飛びなのはめがけて急降下していく。

「きやあ！」

私は動けず身を固めるが

「Protection」

レイジングハートが防御壁を張りなぞの生物を跳ね返す。

「ありがとう、レイジングハート！」

私が、レイジングハートにお礼を言つてゐる時にいつの間にか謎の生物の攻撃が背後に迫つてゐる事に気が付かなかつた。

「後ろ……」

私は、フェレットの言葉で後ろを振り向くとすぐ側まで謎の生物の攻撃が迫つていてレイジングハートの障壁魔法も間に合はないほど近くまで来ていた……

「（ああ、私死ぬのかな？）」

私が、もう駄目だと思い目を瞑つた時

「レイジレーザー！！」

私は、聞いた事のある声で後方から來た援護射撃？によつて謎の生物の攻撃を喰らわず済んだ。私は後ろに振り向くとそこには……

「なのはちゃん、大丈夫！！」

幼なじみで、片思いの相手で私より動きやすいBJを着て両手に双銃を持つた森川のび太君がそこに居た。

なのは side 終了

パリア・ジャケット

のび太 side

僕は、動物病院の近くに到着した僕はまさか幼なじみのなのはちゃんも来て居るとは思つてもみなかつた。

僕は、何とかなのはちゃんの所に向かおうとした時に

「我使命を受けし者也」

「われ使命を受けし者なり」

なのはちゃんが、フレットの後に言葉を言つてゐる事に気が付いた

「契約の下その力を解き放て」

「えと、契約のもとその力を解き放て」

「風は空に星は天に」
「風は空に星は天に」

「そして不屈の心は…」

「そして不屈の心は…」

「…」の胸に…」の手に魔法を…レイジングハート…セシートアップ

と、なのはちやんとフュレットが…言つとなのはちやんは光に包まれた。

「何が起きたんだ！」

僕は、光の眩しさに顔を手で遮りながらそう眩いた。

光が、消えると僕はなのはちやんの方を見ると僕達が通う私立聖祥大附属小学校の制服を改造したような服装に変身していく手には長い杖みたいな物を持つていた。

それを、見た僕は…

「じつして、なのはちやんが…」

僕は、前の世界の事をふつと思い浮かべた。

あの時の僕は、頼りなく弱虫でいつもジャイアンとスネ夫に馬鹿にされてドラえもんに秘密道具を出してとせがんでいた……………けど今は違う頼れるドラえもん達は居ないけど僕は

「なのはちゃんを、助けたいんだ！」

その僕の、思いが通じたのか碧色の珠のネックレスが光った。

【あなたは、何故力を求めるのですか？】

碧色の珠は、光ながら僕にそう言って来て僕は

「大切な幼なじみの女の子を助けたいから！」

僕は、そう碧色の珠にそう言った。

【分かりました、あなたにいいえマスターに力を与えましょう。私の後の言葉を言って下さい】

「分かった。」

【我、運命の優しさの者なり】

「我、運命の優しさの者なり」

【神速の如く、断罪を行つ

「神速の如く、断罪を行つ」

【光と闇は混沌の如く、同一】

「光と闇は混沌の如く、同一」

【そして、5つの優しさを】

「そして、5つの優しさを」

【「この胸にー」の手に魔法をーテネフイフス・ドリガゼットー・ヤットアップー】

「Stand By Ready Set UP」

僕は、なのはちゃんみたに光に包まれた。

【あなたが、使いやすい武器と自分に最適な防具みたいな服を思い浮かべて下さいー】

僕は、テネフイの言葉を聞いた僕はまず自分の武器と自分に最適な防具みたいな服を思い浮かべた。

「（僕には、あれしかない！）」

まず、武器は得意の射撃を補う為双銃にして最適な防具みたいな服は動きやすい服をイメージした。

光が消え、そこには黒に緑色の線があしらわれた長いズボンに袖の所から赤色の線があしらわれた黒の服を着たのび太が現れた。

「これが、僕の武器と動きやすい服

【そうです、マスター武器は双銃型の「デバイスで動きやすい服はB^{バリア}・ジャケット」と言います。】

「デバイスに、B^{バリア・ジャケット}」

僕が、自分の「デバイスとB^{バリア・ジャケット}」を見ていた時

「後ろ……」

僕は、フェレットの言葉を聞いてなのはちゃんの方を振り向くとすぐ側まで謎の生物の攻撃が迫っていた。

「（やばい、なのはちゃんが危ない！）そんな事をさせるかレイジーライザー……」

僕は、テネフイをなのはちゃんに攻撃しようとした謎の生物に向かつて射撃し何とかなのはちゃんに当たらず済んだ。

「大丈夫、なのはちゃん!」

僕は、そう言いながらなのはちゃんの方に向かつた。

のび太 said 終了

三人称 said

僕が、なのはちゃんの方に着くとなのはちゃんが僕に喋りかけて來た。

「どうして、のび太君が此処に居るの……」

「何でって、やつのフレット君が呼んだからだよ。」

「のび太君も、この子の声が聞こえたの！」

「うんまあ、そんな感じだよ。」

「そんなまのめのとしたお喋りをしてくると……」

「何を、悠長に喋ってるのー！」

「僕となのはちやんはフレット君に怒られた

「とにかく、僕は援護射撃をするからなのはちやんアーティスを倒せつ！」

「うそ、分かったのーー！」

僕は、謎の生物に向かって射撃をしていた。

「リリカル・マジカル」

「封印すべきは悪わしき器、ジユエルシーードー。」

「ジユエルシーード封印ー。」

「Seal-ing Mode Set UP

レイジングハートから幾つもの桃色のリボンがのび、なぞの生物を縛る

「Stand By Ready」

「リリカル・マジカル ジュエルシードシリアルXXXXI 封印！」

「sealing」

桃色のリボンがさらに伸び今度はなぞの生物を貫く

なぞの生物が消滅すると後から青い宝石が出てきた。

「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて。」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けるとジュエルシードは浮き上がりレイジングハートに取り込まれた。

なのはの変身が解け普段着に戻る。

「あれ？ 終わったの？」

「はい、あなた達のお蔭でありがと〜。」

なのはちゃんと僕はフェレットを心配しちゃがむが、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「『うるせえ』の言葉を口にしたことはない」

「お前が紹介してから家に帰つたよ。

僕は、なのはちゃんを家まで送り家に帰るとお父さんとお母さんとお婆ちゃんと一緒に帰った。

次回に続く！！

デバイスの名前を、応募してくれた拓也= じえんジョーカーさん・シンゴさん・白いサンタクロースさん・クロンさんありがとうございます！

皆さんから送られた「デバイス名」がとっても良い名前だつたために私は蝉は悩んで送られた名前をどうするかと思い皆さんから送られた名前を勝手ながらもじりとつて「デバイス名」を付けさせて貰いました。

誠に申し訳ありません。

デバイス名は、テネフィフス・ドラゼットです。

主人公設定とデバイス設定（前書き）

少し、修正しました。

主人公設定とデバイス設定

名前 森川のび太

CV：大谷育江

身長 138cm

体重 34kg

容姿

サラサラした感じの黒髪を肩に掛かるぐらいでキリッとした感じの黒目銀縁眼鏡を掛けている。

性格

優しい・友達想い・鈍感・冷静沈着・たまに腹黒い

fate風ステータス

筋力：C (B+) 体力：C+ (B+) 魔力：A A+ (S+) 身体能力：B+ (A+) 空戦：A- (AAA) 射撃能力：SSS (EX)
知力：A+ 幸運：A

() は、魔力解除状態のステータス

バリア・ジャケット

BJTOAの六神将のシンクが最終決戦で着ていた服の色違いと首にスカーフを付けている!!

魔力変換資質

疾風

設定

ある日、友達のジャイアンとスネ夫としづかちゃんと一緒に学校帰りに子供が車に引かれそうになり変わりに庇つて死んだら別の世界に転生した。

デバイス名：テネフィフス・ドラゼット

通称：テネフィ

CV：竹内順子

インテリジェント・デバイス

性別：女

マスター：のび太

性格

優しい・腹黒い・マスター命

設定

のび太のデバイスで、双銃型のインテリジェントデバイスでありのび太が思い浮かべれば色々な銃型に変化する事ができる。

第四章・無印編3（前書き）

PVアクセスが、いつの間にか1万越えとお気に入り登録数が20になっていた。

こんな、駄文ですがこれからも頑張ります！！

昨日夜無断で外に出てお父さんとお母さんに怒られた、翌朝僕は何となく早起きしてしまった。

「まだ、朝の5時半か。（昨日は、大変な1日だったな）」

そりやあ、前世の世界でも色々な事が合つたからそこまで驚く事はなかつたけど……

「まさか、また魔法が使えるとはねえ。」

ぼくは、そう独り言を呟いた。あの時の魔法はドラえもんの道具のもじもボックスで魔法が使える世界になれと思い使つたら魔法が使える世界になつた。そして今の魔法はデバイスを使う事で魔法が使える用になる事が出来る！僕は、ベッドから起き上がって自分の机の上にあるテネフィに挨拶した。

「おはよー、テネフィー！！」

【おはよー！】

「昨日は、あんな事が合つたから話を聞けなかつたけど今はまだ学校に登校するまで時間があるから聞くけど昨日も最初に言つたけど僕はなのはちゃんを助けたいんだ！！君は昨日の双銃モード以外になるには僕が双銃モード以外を想像すればそれになるんだよね？」

【はい、そうです！マスターが知る銃系なら一部を除いてなら大丈夫です。】

テネフィの、その言葉を聞いた僕は……

「（なら、あれも僕が想像すれば……） そうか、分かったよありがとうテネフィ……」

【いいえ、お役にたてて良かつたです。】

僕は、テネフィにそう言つとテネフィを待機モードのネックレスになつてもらい、いつものように首に掛けて学校の制服に着替えて自分の部屋から出てリビングに向かった。

朝ご飯を食べて、僕は鞄を持っていつものようにバス停に向うとアリサちゃんとすずかちゃんとなのはちゃん達がもうバス停に来ていた。

「おはよう、三人共ーー！」

「　　おはよう、のび太／君」

僕は、三人に挨拶すると三人も僕に挨拶を帰した。バスが着て僕と三人はバスに乗ったーー！

「そう言えば、聞いた？」

「何を」

「あの、フーレットを預けた動物病院何か事故で壊されたみたい何だよねーー」

「　　（ギクッ！？）」

「そ、うなんだ、あのフェレット大丈夫かなあ？」

アリサちゃんが、あの動物病院の事を話した時僕となのはちゃんはドキッとしてすずかちゃんはフェレット（ユーノ）を心配していた

……

「あのね、その事何だけどあのフェレットなら、私とのび太君が保護したよ。昨日のび太君とのび太のお父さんとお母さんが家に来ていてジュースとお菓子無くなつたから一人で買いに行く途中動物病院の近くを通つたからあのフェレットが外に出ていて私とのび太君を見つけて向かつてきたところを保護したから、安心していいよ。すずかちゃん……」

「そ、うなんだ」

そんなこんなで話をしている間に4人を乗せた通学バスは私立聖祥大学付属小学校に到着した。

授業中、ジュエルシードの事を、なのはぢゃんと僕はコーカの説明を聞いていた。

『……ってわけなんだ。』

コーカの念話で2人に事の事情を話した。

コーカ曰く、ジュエルシードはコーカが偶然発見。危険度が高いために本局に護送される事になった。

しかし、ジュエルシードを護送していた艦が何者かの『次元跳躍魔法』を受けて、壊滅してその際、ジュエルシードが『地球』に散らばった。

『『でも、それならコーカ君のせいじゃないよ／ね？』

なのはぢゃんと僕の意見は最もである。

コーカはジュエルシードが飛び散ったのは自分のせいだから、自分で回収するという意見である。

しかし、ジュエルシードが飛び散ったのは護送艦を攻撃して何者かが原因である。つまり、コーカに責任はないのだ。

しかし、コーカは……

『あれを発掘したのは僕だから……』

そつまのコーカの意見になのはぢゃんと僕は押し黙った。

時間はあつと/or間に過ぎて、放課後……

なのはちゃんと僕はアリサちゃんとすずかちゃんと、別れて一緒に帰路についていた。

「ねえ、のび太君が首から掛けてるペンダントって……」

「なのはちゃんの察しててる通り、昨日一緒に戦つた僕の相棒“テネ フィフス・ドラゴン”だよ……」

僕となのはちゃんは、そんなこんなで会話をしていた時

「「「」」

僕となのはちゃんは、膨大な魔力に反応した。それが意味するのは『ジュエルシード』の発動。

僕達はお互いに頷きあうと魔力の発生源に向かつた。

魔力の発生源はとある神社だった。ユーノも手前で合流した。

石段を駆け上がった先に居たのは、6つの目がある黒い野犬だった。

「ジュエルシードが原住生物を取り込んでる……」

「するとどうなるの？」

ユーノの咳きになのはは質問する。

「要するに、パワーアップしてるから気を付けろって事だよ……」

なのはの質問に答えたのはユーノではなく、のび太だった。

黒い野犬はのび太達の存在に気づいたのか、なのは田掛けて飛び掛かつて来た。

「……テネフィフス……」

【オンライン】

のび太は、一瞬でバリア・ジャケットを纏い、黒い野犬をテネフィフスをガンブレードモードを展開して受け止めた。

「なのはちゃん…… 今の内にレイジングハートを起動させて……」

「ふえ！ でも、どうやって？」

テネフィフスには封印術式は登録されていない。ジュエルシードを封印するにはレイジングハートが必要不可欠なのだ。

「なのはちゃん！ 念じて見て……」

「うん！ レイジングハート、お願い……」

なのはの声にレイジングハートが反応し、起動する。
「起動パスワード無しに起動した！？」

ユーノが驚く。

僕は、黒い野犬にガンブレードで何回か斬りつけた後後ろに後退してガンブレードモードを双銃モードに戻して……

「プリズム・バレット……」

黒い野犬は、僕が双銃から放った魔力弾丸で黒い野犬は怯んだ。それを確認した僕は……

「……なのはちゃん！」

「うん！リリカル マジカル ジュエルシード、シリアル10…
封印！…」

《シーリング》

桜色の紐が野犬に巻き付き、ジュエルシードが封印される。封印されたジュエルシードは前回と同じように赤いコアに吸収される。

「お疲れ様、なのはちゃん。」

「ふえ～、緊張したよ～」

「そりそり、帰ろうつづ」

「うん。行くよ、ゴーノ君ーー。」

僕となのはちゃんとゴーノはその場から離れて家に帰っていた。

こうして2つ目のジュエルシードは無事に回収された。

次回に続く！！

第五章・無印編4（前書き）

すいません、更新遅れました。

後、後書きにアンケートを設置しました。

2つ目のジュエルシード回収から数日が経過した。あれからも順調に回収し、回収したジュエルシードは四個になった。

そして、なのは達はなのはの父が経営するサッカーチームの試合観戦に来ていた！！

「のび太君！頑張つて！」

試合様子を見てみると奮闘する男子の中に我らが主人公森川のび太がグランドを華麗にドリブルやフェイントをして相手を翻弄しながら駆け回って居た。

何故、のび太が参加しているのかというと、チームに欠員が生じて、代理として運動能力を有するのび太が抜てきされたからである。

結果から言えば、のび太のハットトリックとアシストにより敵チームの惨敗だった。味方はのび太の得点とアシストのおかげでどんどん得点するのに対し、敵チームはのび太によつてことごとく妨害され、得点出来ずに無情にも試合終了のアラームが鳴り響いた。

「相変わらず、のび太は運動神経抜群よね。」

「本当だよね～」

「私も、のび太君みたいに運動神経良かつたらな。」

「さうかな、買いかぶり過ぎだよ。僕はあんまり運動神経良くない
よ。」

あの後、僕となのはちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんは十郎さ
んが喫茶翠屋に来ていた。

「（それに、僕は頭も運動も悪かったんだよな。）

のび太が、そんな事を考えていると……

「それにして改めてみるとこの子フーレットとはちょっと違わな
い？」

「……」

「そういえば、すずか、動物病院の医院長先生も変わった子だね
て言つてたし。」

アリサの言葉に、すずかまでユーノの事を疑いだした時翠屋の中か
ら選手達が出てくる。

「アリサが今まででした~」

「今日はすじにいできだつたぞ、来週からまたしつかりがんば
っ

て次の試合も「の囲碁子で勝つ」

「はー、ありがと「の囲碁子で勝つ」

選手達は解散していく、そのうちの一人が鞄から青い宝石を取り出しぴけに入れていれたのをなのはは見たが、なのはは氣のせいかと思ったのが追いかけなかつた。

「さて、私達も解散する?」

「うん、そうだね。」

「せつか、今日はみんな午後から用があるんだよね?」

「うん、私はお姉ちゃんとお出かけ。」

「パパとお買い物。」

「僕は、家に帰つてお風呂に入った後図書館に行こうかなと思つてゐる。」

僕達は、そなのははやんに言つた。

「じゃあアリサちゃん・すずかちゃん・のび太君月曜日はお話を聞かせてね?」

「お？みんなも解散か？」

「今日はお誘いいただきありがとうございました。」

「試合かつによかつたです。」

「ははは、みんなありがとな。それと、のび太君今日はありがとうございます！後帰るなら送つていこうか？」

「いいえ、役にたつて良かつたです！後、一人で帰れます。」

「迎えが来るので。」

「同じです～」

「なのなばじうある？」

「ん～おひいき帰つてのんびつある～」

「はは、わうか」

「じゃあね～」

「それでは。」

「また明日～」

のび太 side

なのはちゃん達と別れた僕は家に帰つてお風呂に入つた後図書館に本を返して家に戻ろうした時ジュー・エルシードが発動したのを感じた僕はテネフィを発動させてBJ^{リア・ジャケット}着け急いでジュー・エルシードが発動した場所に向かうとそこにはなのはちゃんとコーノが先に到着していた。

のび太 side end

なのは side

なのはとコーノもジュー・エルシードの発動に気づきマンションの屋上に上がり変身する。

「レイジングハート、お願ひー！」

なのはは街の状態を見て驚いていた。

「ひどい…。」

「ジュエルシードを人間が発動させちゃったんだ、強い思いを持つものが願いを持つて発動させたとき一番強い力を發揮するんだ。」

「（やつぱりあの時の子が持つてたんだ、私気づいていたはずなのに）ことになる前に止められたかもしれないのに…。」

私が、自分のせいどころか現状になつたと想つていて…

「なのははちゃん…！」

のび太君も、駆けつけ付けてくれた。

「のび太君、どうしよう…。」

私は、余りにもの状況に取り乱していた。

「なのははちゃん、とにかく落ち着いて。」

私は、のび太君の言葉で少し落ち着いた！！

「ユーノ君、いつときはどうしたらいいの？」

私は、ユーノ君にどうしたら良いか聞くと…

【ジュエルシードの位置が不明ですから、サーチ系を使うのがいいですよ。】

のび太君のデバイス、テネフィフスさんが私に助言してくれた。

【現状を開いたいのでしょうか？】

「はい！」

なのはは杖を掲げると足元に魔法陣が展開される。

「Area Search」

「リリカル・マジカル 探して災厄の根源を！」

魔法陣から幾つもの光が木々に向けて放たれる。

そして

「見つけた！」

「本当?」

「すぐ封印するから。」

「無理だよ、ここからじゃ遠すぎる……。」

「できるよ大丈夫。そうだよねレイジングハート……。」

レイジングハートの塚がのび、先端の形状は音叉のような形状に変化した。

「Shooting Mode Set UP」

「行つて!捕まえて!」

レイジングハートの周りに幾つもの輪ができジュエルシードに向けて光が放たれる。

「Sealing Stand by

「リリカル・マジカル ジュエルシードシリアルX 封印!」

なのはのかけ声とともに放たれる砲撃、その砲撃はジュエルシード

を確実に捕らえた。

ジユエルシードの封印とともに街に生えていた木々が消えていく。
しかし、災厄の爪痕は酷かった。

「いろんな人に迷惑かけちゃったね…。」

「えっ？ な、なに言つてゐるんだ、なのはなぢやんとやつてへれてる
よ。」

「…。」

「私氣づいてたんだ、あの子が持つてゐのでも氣のせいだつて思つ
ちゃつた。」

「なのは、お願い悲しい顔をしないで元々は僕が原因で、なのはは
それを手伝つてくれてゐるだけなんだから。なのはーなのはなぢや
んとやつてくれてる。」

ユーノ君が、私を励ますよつと言つたがどうも自分を責め
てしまつ。

その時

「なのはなぢやん、後悔して立ち止まるな！ 今まで終わるよ
？ 決めたことを諦めるのなら、僕が変わりにジユエルシードを集め
るから今まで集めたジユエルシードをレイジングハートから出して

レイジングハートをユーノ君に帰して家に帰りなよ。」

「？！」

のび太君は、冷たく私にそう言ったが本当は私がこれ以上後悔しないようにする為に言った事を私にこれ以上魔法使いになつてはじめの失敗を自分のせいで誰かに迷惑がかからないとする為に私はあの後のび太君に迷惑を掛けるかも知れないけど私とこれからもユーノ君のお手伝いを一緒にすることに決めて私は自分なりの精一杯じやなく。

本当の全力でユーノ君のお手伝いではなく自分の意思でジュエルシード集めをしようと思いました。
もう絶対こんなことにならないよ!!。

なのは s i d e e n d

次回に続く！！

ここにちは、作者の空蝉です。アンケートは、ドラえもんキャラ達と秘密道具を希少スキルとして出すかです！－

ドラえもんキャラを出すとしたら

1・ジャイアン

2・出来杉

3・スネ夫

三人の内一人でこの後でのフュイントはやての彼氏にしたいと思います！－

後、秘密道具を、希少スキルにして出すか希少スキルじゃなくて普通に出さないかのどちらかでお答え下さい。

それから、秘密道具を希少スキルとし出すに当たって秘密道具の使う道具を制限などドラえもんのポケットやスペアポケットが無いのでどのように秘密道具を出すかのアイディアも募集中です！－

期限は、今週の金曜日までです！－

第六章・無印編5（前書き）

昨日、誠に申し訳ありませんでした。

バイトが、入ってしまい今日更新しました。

後、あるドリームもんキャラを出しました。

すいません、後書きにまたアンケートを実施しました。

度々、すいません…！

僕となのはちゃんはすずかちゃんとアリサちゃんのお誘いを受けて月村邸にやつってきた。

高町家と森川家と月村家はそれなりに距離が離れており、僕となのはちゃんはバスに乗つてやつてきた。

今回はユーノ君となのはちゃんのお兄さんである恭也さんも同行している。

ちなみに、僕は恭也さんとはとても仲が良いのでバスの中で色々な話をしていた。

バスに揺られること数分後月村家の近くのバス停に着き僕達は歩いて月村家に向かつた。

歩く事、5分やつと月村家に到着した。

やつぱり何回来てもすずかちゃんの家はデカいと思つんだよな

と、僕が心の中でやう思つていると玄関からすずかちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんのお姉さんで恭也さんの彼女の月村忍さんとメイド長さんのノール・K・ヒーラリヒカイトさんが出迎えてくれた。

「お待ちしておりました、なのは様、のび太様、恭也様。」

「ああ。」

「「「」」んこひは、忍わん・ノエルわんーーー。」

「「」」んこひは、なのはちゃん・のび太君。」

僕となのはちゃんは、ノエルさんに挨拶されてノエルわんと忍わんに挨拶を返すと忍さんも僕達に挨拶を返した。

「では、なのは様とのび太様はこちらへ。」

僕となのはちゃんは、ノエルさんに案内されですすかちゃん達が居る広い中庭に向かった。

「「「」」めん」めん、遅れたーちゃんつたーーー。」

「別に、大丈夫よ。」

「うん、先始まつたばかりだから大丈夫だよのはちゃん・のび太君……」

僕となのはちゃんは、すずかちゃんとアリサちゃんに少し遅れた事を説びて椅子に座った。

「相変わらず、すずかちゃんの家は猫がいっぱいだね？」

のび太に月村邸の猫達が群がっているのを見たなのはがすずかにそう言った。足に擦り寄っている猫、膝の上で寝ている猫とお茶を飲むのに動かしている腕以外に猫がくつついているのである。

「「うん、気にしないから大丈夫だよ。（……ドラえもん）」

僕は、すずかちゃんにそう言つと膝に座つてゐる猫を撫でながら前世の時にいた猫型ロボットの親友の事をふつと思い浮かんだ。

「どうしたら、ここまで懐かれるのかしらね？」

「あ、あはは」

話してゐる間も猫達はなで〜と/or風に擦り寄つてきていた。
そんな猫達をのび太は撫でていた……

「ナニ？」

ユーノが子猫から逃げていた。

「乙、ユーノ君？！」

と、その時ノエルさんの妹のファリンさんがお菓子と紅茶などを持
つて来た。

「お待たせしました、紅茶とクッキーです。」

ユーノはファーリンの足元を走る抜けた。

「あわつあわわつお~つとつとつと」

ファリンはユーノと子猫を踏まないよう避けているうちにバランスを崩し倒れそうになる。

「ファリン危ない！」

わー！

すずかとなのはは、動搖して叫んでいた時……

「大丈夫ですか、ファリンさん？」

何とか、のび太がいち早く後ろに倒れそうになっていたファリンの背中を支えたが御盆乗っていた紅茶とお菓子は地面に落下してしまった。

「あ、ありがとうございます。」

「気にしないで下さい、僕が助けたかっただけですから。」

僕は、ファリンさんにそう言つた時

キイイイイイ

「「「」」

「ユーノ君・のび太君……」

「なのは・のび太君も感じた?」

「うん、僕も感じた。」

「うん、すぐ近くなの、でも……。」

「そうだ」

ユーノは突然走り出した。

「ユーノ君？ ユーノ君探してくるね？」

「僕も、一緒に探すよ。」

「手伝おうか？」

「すずかちゃんも、手伝うと言つてきたが……」

「ううん、二人は待つてすぐ見つけて来るからさあ？」

僕が、すずかちゃんとアリサちゃんとそつまつとなのはちちゃんとユーノ君の後を追い庭に入つてすずかちゃん達にバレンの距離まで来てなのはちゃんはレイジングハートを僕はテネフィフスを発動させてBJを付けてまたユーノ君を追い始めた。

僕となのはちゃんとユーノ君はジューエルシードが発動するのを感じた。

「ユノだと人目が…結界を張ろ!」

「結界？」

「魔法効果生じていいる空間と通常空間の時間進行をずらすの、僕が少しは得意な魔法だよ。」

ユーノは魔法陣を展開し結界を作る。

結界が広がると木々の奥が折れていき巨大な猫が出てきた。

「……猫なの」

「……猫だね？」

「大きいね。」

「あれは……。」

「大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじやないかな？」

【そのままさきでしょ、それは！】

と、ユーノが言つた事をテネフィイがツツコウされた。

「とにかく、ジュエルシードを封印しよう！」

「そうだね。」

僕となのはちやんが話していると後ろから金色の魔法弾が飛んできて猫に当たった。

「……やあ

ズドオオン

猫がよろけて倒れた。

「今の魔法弾は僕の世界の……。」

「一体、何処から?」

「誰なの?...」

なのは達が魔法弾が飛んできた方を見ると黒色のバリアジャケットを着た少女と深紅色のバリアジャケットと顔に仮面を付けた少年がいた。

「同系の魔導師...ロストロギアの探索者か。」

「.....」

なのはと金色の髪をした少女がお互いを見ている間にのび太は急いで猫に近づき碧色の魔法陣を展開する。

「ジュエルシード シリアルXIV 封印」

「なのはちゃん、ジュエルシードは封印したよ。」

と、のび太はなのはにそう言った時.....

「のび太君、後ろ!...」

あの、金色の髪をした少女の隣にいた仮面を付けた少年がいきなり後ろから攻撃してきた。

僕は、なのはちゃんの声で何とか後ろからの攻撃を喰らわずに済んだ。

「君達は、一体何者何だ！？」

僕は、仮面を付けた少年に何故いきなり攻撃してきたかを聞いた。

「……瞬迅槍」

が、少年は自分のデバイスを槍モードにしてまたもや僕に不意打ちで攻撃してきて何とかのび太はテネフィをガンブレードにして何とか受け止めた。

「俺様達の邪魔をするなー！」

仮面を付けた少年は、そう言つとまたのび太に攻撃を仕掛けた。

「これでもくらえ、墜牙爆炎槍！ー！」

「うわああーー！」

のび太は、それを避けきれず攻撃を喰らつてしまい地面に落下した時に気絶した。仮面を付けた少年も一緒に降りてのび太が封印したジユエルシードをのび太から奪い取った。

「のび太君！？」

なのはも、遅れて地面に降りてのび太の所に向かった。

「フュイト、ジュエルシーードは回収した早く戻るぞ。」

「……うん、わかった。」

「待つて！！」

なのはが、二人にそう言つが二人はその場から消えた。

それから、あの二人が消えて30分後のび太は気絶から目を覚ました。

「ごめん、なのはちゃん・ユーノ君。」

「ううん、謝らないでのび太君」

「そうだよ、悪いのはあの二人組なんだから。」

「ただけど、僕があの時あの仮面の子の攻撃を避けていればジュエルシーードは奪われないで済んだはずなのに！－！」

「のび太君、過ぎた事を後悔しても仕方ないよそれを次にどういか

すかを考えよつた。」「

なのはちやんが、僕こそひと言つた。

「…………うん、やうだね。」「

僕達は、その場を後にしてもすかちやんヒアコサチヤン達がいる場所に戻っていた。

次回に続く！

アンケートは、1Jの前もやりました秘密道具を出すか出さないかの事です！！

皆さんの意見を聞いて色々考えていた時にふと思ったのがこの小説のび太は設定で準チートにしているので秘密道具を出すと準チートがチートになってしまふのではと思いませんがまた意見をお聞かせ下さい。

本当に、すいません！！

第七章・無印編6（前書き）

希少スキルで、秘密道具としてではなく能力としてのび太が希少スキルを使っています。

後、あの仮面少年の正体が明らかになります。（まあ、皆さん予想はしていると思いますが）

あの、謎の少年に敗北した2日後僕はテネフィイを完全に使えるようになるために景色が綺麗な海鳴市展望台公園で僕は空き缶を木の上や物影や色々な所に置き真ん中立つてテネフィイだけ発動させた。

「じゃあお願いね、テネフィイ。」

【分かりました、ではマスター修練開始です！】

僕は、テネフィイの開始の合図でテネフィイを双銃モードにし修練を開始した。

パンパンパンパンパンパンパン

カンカンカンカンカンカンカン

【マスター、次でラストです！】

「分かつた、これで最後ウイニング・バレット！』

僕は、展望台にあるベンチの背もたれの上に置いてある最後の空き缶に新しい魔法（魔力を変換資質の疾風に変換させて）を撃ち込んだ。

パン……カンカンカラカラカラ

【良いできですね、マスター。】

「やうかな？」

【はい、それに今のマスターなら希少スキルを完全に使えると思いません。】

「希少スキル？」

僕は、テネフィイが言つた希少スキルについてテネフィイに聞いた。

【マスターには、希少スキルの空間転移と一時的に空間を完全封鎖出来るものがあるんです。】

「空間転移と言う事は相手や自分が知つてている場所などに転移ができるまたもう一つ希少スキルの一時に空間を完全封鎖出来るスキルは相手を別の場所に空間転移させた後にそこから一時に空間を完全封鎖してそこから自分が居た場所に転移が一時的にできないようになると云う事で良いんだよね？」

【はい、その通りですマスター……】

僕は、テネフィイから聞いたその希少スキルを前世で使つた秘密道具

のビームでもアーティアと地平線テープに似ていると思った。

「ねえ、テネフィ。」

【どうしました、マスター？】

「その希少スキルって、今から使える用にするために特訓する事出来る？」

【マスター、希少スキルの特訓は可能ですがマスターならすぐに希少スキルを完璧に使える用になると想いますよ。】

「そうか、じゃあ早速希少スキルの特訓をしたいんだけどテネフィ良いかな？」

【了解しました、マスター！】

「うして、僕は希少スキルを使えるようになりますためテネフィと希少スキルの特訓を始めた。

テネフィーと希少スキルの特訓から一週間後、今僕達森川家と高町家とアリサちゃんと用村家は海鳴温泉に来ている。道中はもちろんのはちやんと一緒に車に乗り。なのはちやんと僕は車内で色々な話をした。それと希少スキルについてだけテネフィーとの特訓のおかげで3日で完璧に使えるようになった。それからじばりくして海鳴温泉に着いた僕達は、温泉に入ることにしたのだが・・・

「のび太くんーも一緒に入るのー」

「はー?」

僕は、なのはちやんのその言葉に耳を疑つた。

「あの、なのはちやんもーーー回転してられないかな?」

「だから、のび太君も一緒に入るのー。」

「どうせ、僕の耳は正常のよつだ。」

「いやあの、僕は男だからね？」

「でも11歳までなりこっちに入つても平氣なのー。」

「わいわい問題じゃなくて……」

僕が、なのはなちゃんにわいわいと

「じゃあ良いよ、コーン君に入るから。」

「はい？／わゆー？」

僕は女湯にコーン君を連れて行こうとするなのはなちゃんからコーン君を掴み取った。

「いやいや、いぐりペットだからってコーン君も雄（男の子）だから僕が男湯に連れて行くよ。」

と、僕はコーン君を連れて男湯に入った。

男湯に入つた、僕とユーノ君は体を洗つた後温泉に浸かつているとユーノ君が念話でお礼を言つてきた。

『先は、ありがとうのび太君。危うく、淫獣ユーノ何て呼ばれるとこうだつたよ！』

「（当たり前だよ、ユーノ君いくらペットだからつて女湯に入る何て有り得ないよ。）」

『うん、そうだね。』

「（でも、良かつたね僕が居て居なかつたら今頃ユーノ君女湯に入つていたかもよ？）」

『まさか、そんな事ないよ～』

「（でも、内心はなのはちゃんと入りたかった何て思つていなによね？（黒笑））」

僕は、ユーノ君に黒い笑みを浮かべながら聞いた。

『ハツハツ、そんな事思つてないよのび太君（汗）』

ユーノは、のび太の黒笑にビクビクしながらも女湯に入る事を否定した。

こうして、ユーノの淫獣フラグはのび太によつて消滅した？

30分後、僕とユーノ君は温泉から出て先に温泉から出ていたのはちゃん達が変な女の人に絡まられていた。

「は～い、おチビちゃんたち。」

僕とユーノ君とのはちゃんは、女人から魔力を感じていた。

「君と君かね、うちのご主人をアレしてくれたのは？」

「女の人、なのはちゃんと僕を指差しそう言つた。

「あの私／僕と貴女は初対面の筈ですよ？変な言いがかりを付けてくれませんか？」

僕とのはちゃんは、女人にそつと言つた。

「ははは『めん』めん。知り合ってよく似てているもんだったから
ね」

「それなら、いいですが気をつけてくださいね。」

僕は、女人にそう言つて……

「忠告感謝しておくれよ」

女人は通り過ぎようとした時に僕とのはちゃんの耳元にそう言つて

『今日は様子見だよ。いい子は大人しくしておくんだね。さもない
とガブツ！』って行くよ。』

すれ違う時に、女人は僕とのはちゃんに思念通話で脣しを掛け
てその場を後にした。

その後、僕となのはなちやん達は卓球をした後部屋に戻った僕は寝ようとした時……

キイイイイイ

「……？」

ジユエルシードの発動を感じた僕はなのなちやんとコーノ君に念話をした。

「(なのなちやん・コーノ君……)

「(うん、私も今ジユエルシードを感じたよ。)」

「(とにかく、ジユエルシードを探しに行こう。)」

コーノ君のその言葉に、僕はテネフィイを持って外に出た。

外に出た僕は、なのなちやんとコーノ君と合流した。

「二人共、変身するんだ。」

ユーノ君に、言われて僕となのはちゃんは変身する事にした。

「「レイジング・ハート／テネフィセットアップ！」

「「Stand By Ready Set UP」

僕となのはちゃんは、レイジング・ハートとテネフィを起動させバリア・ジャケットを着てジュエルシードが発動した場所に急いで向かつたが時既に遅くあの女人の人と謎の少女と仮面の少年が先にジュエルシードを封印していた。

「間に合わなかつたか。」

「あらら・・・あたし、言つたよね？良い子にしてないと・・・ガブツ！・・・つて行くよつて！・・・」

女人人は、僕達にそう言つて狼のよつな姿に変わり僕達に向かおつとした時……

「アルフ、あの眼鏡の奴は俺様の相手だから手を出すな。」

仮面を付けた謎の少年は女人人にそう言つと女人人は

「分かったよ。」

渋々、仮面を付けた少年にそう言った。

「なのはちゃん、あの仮面を付けた少年は僕を指名のようだからあの少女の相手お願ひいね？」

「うん、分かった。のび太君氣を付けてね……」

「うん、分かった。」

僕は、なのはちゃんにそう言つて仮面を付けた少年とその場から離れた場所に向かつた。

なのはちゃん達から、離れた僕は仮面を付けた少年と相対した。

「ねえ、いい加減その仮面を外したら?」

僕は、そう仮面を付けた少年にそう言つが少年は返事を返さない

「ハア、君がそういう態度なら此方から行かせて貰つよ……」

僕は、テネフィイをガンブレードモードにして仮面の少年に攻撃を仕掛けたが少年も自分のデバイスを大剣モードにして僕の攻撃を受け止めた。

「まあ、そんな簡単に行くとは思つていないと……」

ガキッングガキッングガキッングガキッングガキッングガキッング
ツン

僕と仮面を付けた少年はお互い攻撃を仕掛けるが中々決定的な攻撃は受ける事がなかつた。

「（チツ、早くこの場を何とかしてなのはちゃんを助けないと……）

「

僕が、そんな事を考えているとテネフィイが僕に念話で喋つてきた

【マスター、こんな時に特訓してきた希少スキルを使つ時です！】

テネフィの、その言葉に僕は……

「（そうだね、ありがとう）テネフィ君のお蔭で何とかなりそうだよ。」

「

僕は、テネフィにそう言つて仮面を付けた少年に向かつて突撃した。

「ふう、何をすると思つたら突撃か？俺様にそんな物通用しないぞ
！」

仮面を付けた少年は、同じく僕に向かつて突撃してきた。

「（よし、今だ！）」

僕は、仮面を付けた少年とぶつかりそうになる前に希少スキルの空間転移で仮面を付けた少年の背後に回った。

「何！？」

仮面を付けた少年は、いきなり僕が消えて背後に回った事にびっくりしていた

「これでも喰らえ、ウイニング・バレット！…」

僕は、テネフィをガンブレードモードから双銃モードにして仮面を付けた少年にウイニング・バレットを喰らわした。

ウイング・バレットは、仮面を付けた少年に当たりそのせいで少年の周りは煙りが立ちこめていた。

「今のは、直撃したよね？」

僕は、そう呟き煙りが消えるのを待った。

煙りが、消え始めて僕は仮面を付けた少年がいた場所を見るとそこにはウイング・バレットが直撃したのかいたるところに傷を負いバリア・ジャケットも所々破れていたが一番僕が驚いたのは仮面が外れたその少年の顔が前世での親友の一人である剛田武通称ジャイアンその人だった。

「ジャ、ジャイアン？」

「やつぱり、お前はのび太だったか！」

「気付いていたの、僕の事？」

「……嫌、最初の時にお前が俺の攻撃で気絶した時と先此処に来る時にあの女の子がお前の事をのび太と呼んだ時に何となくお前かなと思つてはいたがまさか本当にのび太お前とはな……」

ジャイアンは、そう言った。

「どうして、ジャイアンは此処に？僕は死んだあの後転生して今お親の所に生まれたから居るけど……」

僕が、そつジャイアンに言つと

「…………それは」

ジャイアンが、困ったように沈黙していくと……

「（ジャイアン、此方は終わったよ。）」

謎の少女からジャイアンは念話を受けた

「（分かつた、先にアルフと戻つていてくれないかフェイト？）」

「（分かつた、アルフと先に戻つてるね！！）」

「（分かつた。）」

謎の少女フェイトからの念話を終えジャイアンはのび太にこいつ言つた。

「のび太、今はまだ事情は話せないけどいつか言つから待つてくれないか？」

ジャイアンが、僕にそつ言つと僕は……

「分かった、君が何である少女と居るかは今は聞かないけどひちゃん
と事情が終わつたら理由聞かせてよ?」

「分かった、約束する。」

ジャイアンは、そう僕にそう言つてその場を後にして僕もなのはち
やん達と合流して旅館に戻る事にした。

次回に続く!!

次回は、いよいよKYOUKUROノ君が登場します。

第八章：無印編7（前書き）

更新遅れて申し訳ない！！

今回、KYがやっと登場しました。

「一回田の命合からちよつとして、なのはちゃんとアリサちゃんがケンカした。理由はなのはちゃんが余りにも今回の事を自分で何とかしようと/orしている為喧嘩が起きた。原因はなのはちゃんと僕がアリサちゃんとすずかちゃん達に内緒の事や悩みがあるのにそれを相談しなかつたので喧嘩してしまい、僕となのはちゃんは一緒に帰る事にした。

「.....」

「なのはちゃん、いつまで悩んでこるの？なのはちゃんは昔からもうだよね、いつも自分で考えてたりといふん悩む所は.....」

「.....ん、」めぐなさこ

「いや、僕に謝られても困るよ。ちよんとアリサちゃんとすずかちゃんに言わなこと。まあ僕もだけじね.....」

「うそ.....それはわかつてんただけビ.....」

まあ、言えないよね魔法のことなんじ。

「うそ.....明日、ちよんと謝る

「うひへ、僕も一緒に謝るよ。僕も同罪だからね.....」

僕は、やつらのひとなのだからやんと別れて家に戻った。

その日の夜、ジュエルシードが発動しなのはちゃんとフェイトはまた相対し互いの攻撃が響き、それによりレイジングハートとバルデイツシユが壊れてしまいその場に居た僕は今回中立の立場に徹し僕はなのはちゃんとフェイトにこう言った。

「この、ジュエルシードは僕が一時的に預かる事にするよ。」

「そんな……」

「そうだよ、のび太君どうしてそんな事を言うの！？」

僕のその宣言に、なのはちゃんとフェイトが何でと聞いて来た。

「何故つて？今のお互いのデバイスでジュエルシードを封印何てしたらデバイスは壊れて今までお互いが納めて来たジュエルシードが封印が解けまた集めないとけなくなる可能性が出てくるんだよ？そんな事になれば人的被害が起きる可能性もあるんだよ。それでも二人はその傷付いたデバイスでジュエルシードを封印すると言うなら僕は君達を許さないよ！……」

僕のその言葉を聞いた、ジャイアンが……

「フェイト、アルフ、撤退するぞ……」

「え、でもジュエルシードが……」

フェイトは、のび太が持っている封印されたジュエルシードを見て

ジャイアンにそう言つと

「のび太、そこの白い魔導師のデバイスとフォイトのデバイスが治つたらお前が持つているジュエルシードを賭けてそこの白い魔導師とフォイトと勝負させて勝つた方にジュエルシードを渡す。それで良いか?」

ジャイアンが、僕にそう言つてきて僕は……

「分かった、なのはすやんもそこの黒マントの少女もジャイアンの提案で良いね?」

僕は、そう一人にそう言つと二人は

「分かつた、ジャイアンの提案に乗る。」

「私も、それで良い!…」

二人は、僕にそう言った。

「なら、その勝負は次ジュエルシードが発動してジャイアンが封印した時今僕が持つてているジュエルシードとジャイアンが封印したジュエルシード2つを勝負で勝つたどちらかに渡すし恨みつこなしだからね。」

僕が、そう言つたのはちゃんと黒マンの少女も貢承しあつての場を後にした。

まさか、今回のなのはちゃんと黒マンの少女の戦いにて時空管理局と言つ変な組織が来るとほどの時僕達は思ひもしなかつた。

あの、なのはちゃんと黒マンの少女の戦いにて時空管理局と言つ変な組織が来るとほどの時僕達は思ひもしなかつた。

やんは今だにアリサちゃん達に謝つていらないし僕とあの一件で少し離れていた。

学校から、帰る時公園に差し掛かると、アリサちゃんがいた。

「アリサちゃん。」

「あ、……のび太」

「IJの前は、『めんね！』

僕は、アリサちゃんに謝つた。

「別に、良いわよ。人間誰しも秘密はあるんだから…………でも。」

「（はあ、なのなちやんまだアリサちゃんに謝つていなかつたんだ。）

僕が、心の中でそう思つていたら……

「アリサちゃんお待たせ…………つて、のび太君？」

「やあすずかちゃん。すずかちゃんもいたんだね」

「うん、IJの前のIJとちよつとね。」

すずかちやんは、僕にせりふをした。

「でも、久しぶりだね、喧嘩したの？」

「うん、わうだね。」

「まあ、あの時は私達最悪な出会いにかつただつたわね？」

「うん、あの時はアリサちやんがすずかちやんのリボンを取つてそれを見たのはちやんがアリサちやんにリボンをすずかちやんに返してあげてつて言つたのに。」

「私が、断つたからなのはと喧嘩して」

「のび太君が、一人を止めたんだよね。」

「我ながら、昔の私は我慢で強がつてたからね」

「うん、#はアリサちやんもす」かつたから」

「わうだね。」

僕達は、そんなたわもない話をして僕達はそろそろ帰る事にした。

「アリサちやん・すずかちやん、もう少ししなのはちやんの事待つて

あげてくれないかな?」

「それは、構わないけど。」

「私も

「そう、ありがとう二人共。後少しあつたのははちゃんがちゃんと二人に謝ると思うから。」

「分かった」

アリサちゃんとすずかちゃんは、僕にそう言い僕達はその場を後にし帰る事にした。

その日の夜、海鳴臨海公園にてジュエルシード発動し僕は、ジュエルシードが発動した時テネフィを発動し希少スキルの空間転移を使つて先に海鳴臨海公園に向かった。

「ふう、まだなのははちゃん達は来てないみたいだね。」

僕が、そう呟いた時なのははちゃん達も海鳴臨海公園に到着した。

「のび太君。」

「やあ、なのははちゃん」

「やあ、じゃないの……のび太君と一緒に来たかったの。」

「まあ、それは良いからあれ何とかしよう?」

「……分かったよ。」

なのはちゃんは、渋々僕の言う事を聞いてなのはちゃんは黒マントの少女と一緒に砲撃をする準備をする。

「今だ!」

「うん」

「は、はーーー!」

僕の合図で、二人は木の化け物に砲撃を放った。

「ディバイン! バスター!」

「貫け、轟雷! サンダースマッシュヤー!」

一いつの砲撃が命中。すぐさまジャイアンがそれを封印する。

「これで、大丈夫だわ!」

「あ、ありがと……」

「ふつ、君からそんな言葉を聞けるとはね？」

僕がそう言つと、黒マントの少女はちょっと顔を紅くするがすぐにデバイスを構えた。

「それじゃあ、前回のジュエルシードと今回のジュエルシードを賭けて勝負をしますか。」

僕は、なのはちゃんと黒マントの少女にさしつけた。

二人は、空に浮かび上がって相対した。

「これだけは、譲れないから」

「私はただお話したいだけなんだけど……」

一人は、そう言つて駆け出す。その瞬間、水色の魔法陣が張られた。

「ストップだーここでの戦闘は危険すぎるー時空管理局執務官、クロノ・ララオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか?」

何か、変な奴が来たなと思った僕とジャイアンだった。

次回に続く！

次回は、KYをフルボコにします。

第九章・無印編8改（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！！

後、誤字修正しました。

それと、後書きにまたアンケートです。

のび太 side

僕とジャイアンは、なのはちゃんとフロイトちゃん（ジャイアンから名前を聞いた。）一人の戦いを遠くから始まるのを待つて、いざ始まつて一人があ互いのデバイスを振りかざした時水色の魔法陣が張られ……

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」

何か、変な奴が来たなと思った僕はジャイアンに念話で話をした。

「（ジャイアン、フロイトちゃんを連れて此処から撤退した方が良い！！）」

「（だけど、どうやって……）」

ジャイアンが、僕にそう言つと

「（僕に、任せて。）」

僕は、ジャイアンにそう言つとテネフィをガンブレードモードにしてのSKY（スーパー空氣読めない奴）に向かつて突撃した。

のび太 side 終了

三人称 side

ガキーン

「のび太君！？」

なのはは、遠くから自分とフェイトの戦いを邪魔をしたクロノ？に
テネフィイをガンブレードモードにしたのび太が攻撃して来た事に驚
いた。

「君、いきなり何をするんだ？」

「何をするんだって？それはこっちの台詞だよ！－いきなりなのは
ちゃんとフェイトちゃんの戦いを邪魔をして」

「だから、僕はここでの戦闘は危険すぎる！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうつか？って言ったじゃないか！！」

「ハア、君馬鹿？」「今は地球で時空管理局何て知らないんだよ。」

「嘘を付くな、じゃあ君は何故魔法を使っているんだ？」

「魔法ね～、これはなのはけやんも同じだけどここ最近魔法の事をしたばかり何だけどつてどうせ信じないだろ？」

「だから、嘘を付くな！～ああもう良いく君達を逮捕する。」

それを聞いた、ジャイアンは……

「フヒイト・アルフ、撤退するぞ！～！」

「ううん、分かった。」

ジャイアン達が、撤退しようとすると

「逃がすか！～！」

クロノ（SKY）が、ジャイアン達に攻撃しようととした時

「ファンタム・バレット！～！」

「うわあーー！」

のび太は、テネフィをガンブレードから双銃モードにし魔法弾がクロノに直撃し地面に落下しそれを見たのび太はジャイアン達にこう言つた。

「ほら、ジャイアン早く撤退しなよー」

「ああ、ありがとうのび太。（のび太お前、いつからそんな腹黒い事ができるようになつたんだよーーー）」

ジャイアンは、のび太に助けて貰いお礼を言いながら心の中では親友の腹黒さにちょっと引いてしまつた。

ジャイアン達が、その場を離れて行くの見ながらのび太は手を降つて見送つた。

「（のび太君怖い／なのーー）」

なのはとユーノも、この時ジャイアンと同じ事を思いお互い心の中でシンクロした。

フェイト達が撤退し。地面に落下したクロノが怒りの表情でのび太の前に現れた。

「貴様つ！」

「何を、怒つているわけ？」

のび太が、クロノにそう言つと

「貴様が行つたのは公務執行妨害だ！」

「で？」

「貴様つ！」

のび太が、だから何みたいな事をクロノに向かつて言うとクロノはのび太の態度にキレのび太に向かつて自分のデバイスであるステインガーで攻撃して来た。

「これ以上話しても無意味だ！君を逮捕する！」

「僕を、逮捕するだつて君じゃ無理だよーー！」

のび太は、クロノの後ろに空間転移した。

「何ー？」

クロノは、いきなりのび太が前から消えて自分の後ろに現れた事に

驚いた。

「さて、僕と一緒に別の場所で戦つて貰つよ。」

のび太は、クロノにそう言つとクロノを掘んでその場から転移した。

海鳴市廃工場跡地

のび太は、クロノと一緒に海鳴市廃工場跡地に転移し工場跡地に結界と自身の希少スキルである一時的な空間を完全封鎖した。

「くうつ、貴様こんな所に僕を連れて来てどうする気だ！…」

クロノは、のび太にそう言つてきた。

「そんなの決まつてるじゃん、今から君をなのはちゃんとフェイトちゃんの勝負を邪魔をしたからフルボッ！」にするんだよ！！」

のび太は、クロノにそう言つとテネフィをガンブレードモードにしてクロノに向かつて攻撃を仕掛けた。

「くつ！」

「ほりほり、どうしたの？」

クロノは、のび太の攻撃を自らのデバイスであるステインガーで受け止めたりいなしているがB-^{バリア・ジャケット}や腕などを所々切り傷や破けていたりしている。

「ハアハアハアハアつ」

「そろそろ、終わりにするよ？なのはちゃんとユーノ君を待つたせているからね。」

のび太は、クロノにそう言つとテネフィを双銃モードにしクロノに狙いを定め…………そして

「ウイング・バレット！！」

「うわあああーー！」

クロノは、のび太が撃つたウェイブ・バレットを喰らって地面に落下した。

のび太は、地面に落下したクロノの方に行き……

「バインド！」

クロノの体にバインドを掛けて廃工場に合った繩でぐるぐる巻きにしてのび太は、なのは達の所戻つていた。

海鳴臨海公園

なのはとユーノは、のび太があの時空管理局の人を連れて消えた為お互にどうしようか迷いつぶつぶつしていふと……

「やあ、なのはちゃん・ユーノ君。」

「「のび太君……」」

なのはとユーノは、いきなり現れたのび太にびっくりしたが最びっくりしてしまった。

「の、のび太君の入だつしたの？」

「うん？ ああ、ほりなのはちやんとフロイトちやんの勝負を邪魔したからちゅうとフルボッコにしたんだよ。」

「あ、あの・・・なにもそこまで・・・」

「なのはちやんは、優しいね？ フロイトちやんとの勝負を邪魔されたのに」のうく（スーパー空氣読めない奴）を心配するんだ。」

「それでも、これはいけないと思つ。」

「まあ、こつは此処にそのまま放置してそろそろ帰る？」

「え、でも……」

のび太となのはが、そんなやり取りをしているとき

『待つてくれないかしら？』

いきなり、のび太となのはを呼ぶ声が聞こえた。

「誰ですか？」

『そこそこクロノ・ハラオウンの上司であり、母親のリンディ・ハラオウンと言つ者です。武器を収めてもられないかしら？ それと

私の話を聞いて欲しいのだけど』

「ハア？ いきなり現れて真剣勝負をしようとしている所に訳の分からぬこのSKY（スーパー空気読めない奴）が現れて勝負をぶち壊した奴の母親だからって何故いきなり武器を収めて下さいって言われても信用出来るわけないだろ？」

のび太が、リングディにそう言つと

『私たちに敵意はありません』

リングディは、そうはつきりとそう言つた。

「ねえ、のび太君。」

「何、なのはちゃん。」

「私は、リングディさんって言う人の話を聞いても良いよ。」

それを聞いた、のび太は……

「ハア、待つたくなのはちゃんは優しいね……分かったよあなたの話を聞いてあげるよ。」

のび太は、なのはちゃんと一緒に渋々時空管理局の戦艦がある場所

に向かう事にした。

おまけ

クロノは、のび太によつて引きずられながら時空管理局の戦艦に着いた。

次回に続く！！

第九章・無印編8改（後書き）

今回のアンケートは、プレシアとアリシアの二人を助けるか助けないかです。

助けるなら、1でお願いします。

助けないなら、2でお願いします。

期間は、次回の更新の時に発表します。

空禅「この度は、更新遅れてしまい申し訳ありません……」

なの「どうして、更新遅れたの？」

空禅「えーと、バイトを深夜にやつていて帰つてくるのが朝遅く更新する暇がなかなかなかったからです。」

のび「休みの日に、書いたりすればすれば良いの？」

空禅「ええ、休みの時にたまに書いたりしていましたがほとんどの魔に負けてしまいのよつた事になつてしましました。」

なの・のび「自業自得だね。」

空禅「ええ、本当に私自身の自業自得です。」

のび「それで、今回は更新したけど次の更新日は何時なの？」

空禅「次回更新日は、すいません完璧年明けになります。」

なの・のび「「そんなわけで、こんな駄目作者だけどこれからも応援して下さる」

では、リリードラ～優しき少年の恋物語～第十章始まります

僕は、なのはぢゃんとユーノと一緒に（後つこでにSKYモ）に時空管理局所属艦『アースラ』に着いた。

「初めてまして、時空管理局所属艦『アースラ』の艦長、リンク・アースラオウンドです」

「アースラ通信主任のハイミィ・コモットタです」

「高町なのはです！」

「ユーノ・スクライアです」

「……森川のび太です。」

僕は、の上司で母親のリンク・ディセイドンを引き渡した。

「それで、僕達に話とは何ですか。まあその前にあなた達の素性を明かして貰いませんか？なんたつて僕やなのはぢゃんは、管理局何て知りませんから。」

「分かりました、お話ししましょう。」

僕となるのはちやんは、リンクティさんの話を聞いて僕は思った。

「（うーん、なるほど）うえもんの居た未来の未来警察みたいなものかな？」

確かに、リンクティさんの話を聞いて未来警察みたいな感じと思つたけど……

「（大体、何百年前から存在する組織とこいつのは言つまでもなく上層部が腐っている場合があるんだよね。）

「そうですか、世界規模の警察組織ですか

「ええ、平たく言えばですか。」

「……そうですか」

「後、そのフレット君元の姿に戻つたらどうかしら?..」

「「はい?」」

フレット君?

「そうですね、分かりました。」

リンディさんに言われたユーノは、返事をしてユーノの身体は光が包んで少し経つてフレット姿のユーノではなく僕やなのはちゃんと同じ年齢くらいの少年姿のユーノが現れた。

「え~と、なのはどのび太君にはこの姿では初めてだね。」

「ユーノ君?」

「うんそうだよ、なのは

「本当に、ユーノ君なのかい?」

「うん、そうだよ。」

「「そうかな、僕・私と O H A N A S H I しようなの
／か？」

「え～と、一人共？」

「「覚悟は、良いか／なの？」

「ちよつ一人共まつ、ぎやあああーー！」

「さて、話に戻りましょつか

「？ええ、そうね

僕となのはちやんの、O H A N A S I から復活したコ
ーノがジュエルシーードと僕達の世界に来た理由をリンクティさんに話
した。

「なるほど、立派だわ

「だが同時に無謀でもある」

リンディさんはユーノの話を聞いて感心し、クロノは呆れていた。

「これよりロストロギア『ジュエルシード』の回収には、私達時空管理局が全権を持ちます。」

「えつ……」

「君達は、今回の事は忘れて元の暮らしに戻るといい

「でも……そんな……」

「これは、次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

「まあ急に言われて気持ちの整理がつかないでしきつから今晚一晩「リンディさん」何かしら

「そんな回りくどい事しなくても、僕は協力しますよ その代わり条件がありますけど……」

「一晩考えなくとも良いの?」

「ええですから、その代わり条件付きですが

僕は、そうリンディさんに言った

「分かりました、協力してくれるみたいだからあなたの条件を飲みましょ。」

「ちよつ、艦長……」

「何かしら、クロノ

「そんな、勝手な事して良いんですかーー？」

「何を、今せりげに艦の艦長は私よ。今は、私が法律よ。」

リンクティさんは、何かノリノリでクロノにそう言った

「はあ、分かりましたよ。」

クロノは、ため息を吐きながらそんな自分の母親に少し憂鬱に感じた。

「それじゃあ、あなたの条件を聞いづ、「待って下さこーーー」何かしらなのはまさと？」

「あの、私ものがび太君と一緒に協力します」

「なのはちやん、じうじへ……」

「私は、のび太君の友達だよ。そんな友達が一人でやるひつとしているのに、私だけやらないのは私自身が嫌なの！…だから…」

「はあ、分かつたよ。なのはちゃんは昔から「ういつ」の時は頑固だからね」

「私は、頑固じやないもん」

「分かりました、なのはさんあなたものび太君と同じで協力してくれるで良いのね？」

「はい」

「分かりました、あなた達を民間協力者とします！…」

「「ありがとうございます！」」

「それじゃあ、ユーノ君は私達が責任を持つてあなたの世界に届けます。それで良いかしらユーノ君」

「僕は…僕も、あなた達に協力します！…元々僕が原因何ですなはやのび太君だけに任せておけません」

「分かりました、ユーノ君あなたも民間協力者として協力参加を認めます。」

「それじゃあ、今日はもう遅いですからのび太君君の参加条件は明日聞きますから学校の帰りになのはさんとゴーノ君と一緒に来て下さい」

「分かりました。」

僕達は、リングディさんにそう言いアースラから出て家に帰った。

次回に続く！！

リワードラクロスオーバー 優しき少年の恋物語～を書き直しする事になりました。

理由は、プレシアやアリシアを助ける方法がある方法でしょ、うとしましたがあれこれでは駄目じゃねと思い他の方法を考えましたが思い浮かばなくそれとこれから出す予定のオリ敵さん達やのび太やジヤイアンなどドラえもんキャラの力をもつとチートにして再執筆した方が良いと思い書き直しする事にしました。

誠に勝手ながら更新を待っていた皆さん本当に申し訳ありません…！

作者空禅より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3287w/>

リリドラクロスオーバー～優しき少年の恋物語～

2012年1月10日19時54分発行